自称未来が読み子さん

猫海月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
自称未来が読み子さん

【Ｎコード】
Ｎ１６３０ＢＡ

【作者名】
猫海月

【あらすじ】
メインキャラは皆主人公が好きという、いずれはハーレムか何かのゲームの様な内容
爆発すればいいのにね
基本ほのぼの

読み子さん説明書（前書き）

知ってる人は知ってる、知らない人は知らない作品です
昔連載してましたが、書けなくなったので
もう片方の連載が少しアレなので、イカン心が折れる！ということで気分転換に多少弄って再連載決定

ぎゃー！やらかしてるー！
酷いものをお見せしましたすみません・・・

一応3話は確定してますが・・・続くといいなー？
ではでは不定期連載、まったりとお付き合い頂けたら幸いです

・読み子さんに辛いものや熱いものを与えないでください
・読み子さんに話しかけるなどの刺激を与えないでください
・読み子さんを見るときは明るいところで離れて見ることにしましょう

読み子さん説明書

目覚ましのベルで目を覚ますと、まだ温もりが残っていて名残惜しい布団を丁寧に畳んで顔を洗う。真っ赤になりつつある手を擦りながらストーブを入れると、コーヒーの準備をして本を手に取る。ちなみに本のタイトルはくらげの百戦の歴史というわけわかんないもの。友人に何か暇つぶしになるものは無いかと聞いたら、コレがいいと渡された。内容は面白くもなくつまらなくも無いので何処でやめてもよく、確かに暇つぶしにはなる。

しばらくの間、寝息とページをめくる音、そしてコーヒーのこぽこぽ音が静かな部屋に響いていており、彼女との会話の邪魔をするものは何もない。僕の一日の中で最も穏やかな時間。

その数分限りの穏やかな時間も、一人の少女が目覚めることで終わりを告げる。少女はパジャマ代わりの麻色の浴衣に癖のある藍色のショートの髪、まだ幼い表情はしぱしぱと瞬きを繰り返しており、まだ夢現。

彼女は我が六畳一間の同居人2号であり、正式な住民という意味で数えると2号の立場を得ている。呼びかけても誰一人来なかった僕の元に来た奇怪な存在。ちなみに本人は『コウノトリ君1号』とか名乗ってるのだけれど、誰もそんな長い名前で呼ばない。そして、2号以降が居るのかは永遠の謎であって欲しい、と僕は切に願っている。

「おはよう、よく眠れた？」

「あい…おにーさんおはようございます…」

挨拶をした後、コウはのそのそと動くと僕の背中にペターっとくっつき始めた。ちょうど後ろから密着するように抱きしめられる形になるのだが、幸か不幸か背中から感じる彼女の自己主張はとても

少なく、僕の精神は穏やかな状態を保ち続けている。
　コウは格好の湯たんぽとなるので、冬場は手放せない存在となる。子供特有の高い体温と何処か甘いような不思議な匂いを背中から感じながら、そろそろ雪でも降りそうだな…とか後ろから襲い掛かってくる現実から目逸らして読書を再開する。
　しばらくすると満足したのか、ゆったりと背中から離れると、のたのたと四つんばいになりながら僕の前まで来るとごろん、と膝の上に頭を乗せた。

「…んー」

　男でも膝枕というのだろうか？とか考えながらコウの髪をサラサラとなでると、彼女は気持ちよさげにして二度寝の体勢へと移る。こうなるともう読書は諦めるしかないので、寝顔を眺めたり外を眺めたり、目で会話したりしながら、コーヒーのこぽこぽ音と寝息の静寂を楽しむ。
　やがてその静寂も炊飯器がご飯を炊き上げた音を合図に終わりを告げた。朝ごはんが遅れると不機嫌が加速する人物が我が家にはいるので、コウを起こして朝食の準備を始めることにする。我が家の神器、『何時でも何処でも春模様ストーブ』のおかげで部屋の中は春模様。購入するときは不安だったけれど、名前に偽りなしで安心。
　微かに後ろから聞こえてくる衣擦りの音をなるべく意識しないようにしながら、トースターにパンをセットし、フライパンにベーコンと卵をぶち込む。油も味付けもいらず、ただ焼くだけで出来るベーコンエッグは偉大だ。
　やがて着替え終わったのか、浴衣から割烹着姿になったコウも台所へと参戦した。とはいえ、僕はフライパンを持って木偶の棒の如く眺めるだけだし、彼女はそんな僕の腰に抱きついているだけなので、変わっていくのは体感温度と匂いくらいだ。

「君たちは朝っぱらから暑苦しいものを見せてくれるね…」

そんな朝食風景も終わりに近づくと、件の人物が目を覚ましたらしく後ろから不機嫌そうな声が聞こえてきた。暖かくなるまで起きない彼女を見てると、いつもクマを思い出す。

「おはよーございます」
「おはよう、読み子さん」
「ん、おはよう」

そう、彼女こそが今回の話のメインとなる読み子さんで、哀しむべき押し入り住人第1号。本人曰くホテルも取っているらしいけど、行った所を見たことが無い。名前は秘密で『自称未来が読み子さん』というらしいが、コウと同じく誰もフルネームで呼ばない。それにしても、何処までが名前なんだろう。

読み子さんはクマさんのちりばめられたパジャマに身を包み、髪は長く、白に近い綺麗なグレー。本人曰く銀色ではないらしい。たとえ不機嫌そうにしていても、彼女の顔は整っており黙っているならとても美人に見える。

だがしかし、その表情よりもパジャマからすらりと伸びている手足や、無造作に掛けられたボタンからちらりと覗ける柔肌へと目が行くのは、男としてしょうがないことだと思う。このまま読み子さんと生活し続けたら、いずれは悟りの局地へと達してしまうのでないか、と僕は日々戦々恐々としながら生活している。平穏な人生は望むけれど、そこまで平穏になりたく無い。

とはいえ冬眠開けのクマさんが不機嫌となるのはいつものことなので、特に対処することもなくご飯をよそい、トーストと少し焦げたベーコンエッグを皿へと乗せ、牛乳、そして読み子さん用のオレンジジュースをちゃぶ台へと運んでいく。

読み子さんは朝食は和食、という断固とした意思があるらしく、

和食以外は受け付けない。ちなみに僕はおかずが何であろうとご飯さえあれば和食になる、と信じているので彼女の朝食はいつもご飯＋何かとなっている。今のところ文句を言われたことは無い。
朝食中、他の二人が静かなのは別に不機嫌だからとかではなく、単に眠いのが原因だろう。

「それにしても、君たちはよくそんな苦いものを飲めるね」

僕がブラックのコーヒー、コウがミルク入りのコーヒーを飲んでいる様子を見た読み子さんが、私には信じられないなとでも言うようにぽつりと呟くと、ご飯を口に運んでオレンジジュースを飲んだ。私的にはオレンジジュースさえあればおかずが無くともご飯が食べれる読み子さんの方がよっぽど信じられない。味噌汁を作ってあげたらどうなるのだろう、今度試してみようか。
そんな読み子さんの嫌いなものは苦いもの、辛いもの、熱いもの全般。好きなものは甘いもの全般、というその大きい見た目に反したお子様な舌を持っている。頭脳を使うと甘い物が欲しくなるというのは本人の談。それでもカロリーを気にしている姿を見ると、何ともいえない気分になる。
過去に一度だけ、中辛のカレーを食べさせたことがあるのだが、読み子さんは一口だけ食べた後、涙目で僕を叩いて抗議してきた。普段見れない彼女が見れたのでとても面白かったのだが、それ以降食べさせたことは無い。
ちなみにコウは見た目に反して嫌いなものは無いらしく、美味しそうに食べていた。

□　□　□　□

僕と読み子さんの通っている学校に制服はあれど、私服登校も認められている。割合は半々くらいで、毎朝服を選ぶのが面倒な人は制服を着てくることが多い気がする。もちろん、律儀に制服を着てくる生真面目な人も居る。ちなみに僕は制服派。理由は言わずもがな。

そういうわけで私服も認められているのだが、まさか学校側も学生で白衣を普段着にする馬鹿が居ることは予想外だっただろう。下に着ているセーターで白衣が少しもこもこしてる。

「それにしても、少年はよく飽きもせずに通えるな」

その馬鹿（よみこさん）が僕の隣でぽつりと呟いた。

読み子さんはちょこちょこ醤油の染みが付いている白衣を着ている。何故か洗濯するのは僕だ。

ただ、知的に見える彼女の抜けているところがツボに入るのか、ころりとやられて読み子さんに告白をする兵たちは後を絶たない。そして、そのまま夢の跡になる者も後を絶たない。

そして彼女の好物は甘いものの他に焼肉というものがある。ステーキではない、焼肉である。大量の肉を焼いて美味しそうに貪る姿は、見ている者に満腹感と胸焼けをプレゼントするだろう。お願いだから、焼肉の時くらい汚れてもいい服を着て欲しい。

その様子を見た友人は食人植物みたいだ…というコメントを残した。読み子さんは必死になって否定していたが、僕は的を射ていると思う。

そんな読み子さんと白い息を吐きながら並んで学校の中庭を歩いていると、水着一枚の男連中が身体を震わせながら走ってきた。何を隠そう、彼らこそ我が校の名物ともいえる水着サークルである。同じ水着同士仲良くすればいいのに、水泳サークルを敵対視していると言うもっぱらの噂。

彼らは一年中学校に通うときは水着しか着ない、という鉄の掟を

持っている漢のサークルであり、決して露出狂の変態集団ではない。当然、今は冬なのでとても見ていられないほどの姿になるが、なぜか入部するものが後を絶たない。その勢いは入部すると彼女が出来る様になる、という七不思議が出来上がるほどで、今日も夢に敗れた勇者たちが涙を堪えてサークルのドアを叩く。

今はおそらく日課となっている水着マラソンの最中なのだろう。打倒水泳部を目指しているという話の彼らは今日もトレーニングを欠かさない。何故プールでしないのか？という疑問には水泳サークルに使わせて貰えない、という切ないストーリーがある。そんな彼らが水泳で水泳サークルに勝てるはずも無く、彼らは敗北の原因を己の体が弱かったから、という現実逃避へと置き換えて今日も陸上でのトレーニングを欠かさない。そして、そんな彼らに思わず涙を流すものも少なくない。

「…まるで変態だな」

その勇者たちを見た読み子さんが呟くと、突如彼らの走る速度が上がった。ああ、彼らに幸あれ。

「少年はああいうのが好きなのか？」

僕が悲しみと寒さを振り切って明日へと走り去っていく勇者たちを見ていると、読み子さんが半眼で聞いてきた。

「いえ、僕はいいです」

「そ、そうか」

僕は村人Ａを目指すしがない学生だ。応援こそすれ、勇者になりたいとは思わない。

そんな勇者たちを見送り、やがて教室に付いたので席へと座る。

読み子さんは席には付かずに僕の机の上に座り、しばし視線を宙へと浮かせたり窓の外へと向けたりと忙しなく動かし始めた。

「そうだ少年、泳ぎに行かないか？」

そしてさも今思い付いたかのように言ってくる読み子さん。今は冬だけど、屋内なら平気だろう。真冬に泳ぐという思考が僕にはよくわからないけど。

「それはいいですが、水着がありませんよ？」

当然ながら読み子さんは僕より年上で、ちゃんとした職を持ってる社会人の一人。年齢は教えてくれなかった。

「ああ、そうだな…それでだな…その…だな…」

読み子さんはまたうろうろと視線をさまよわせている。ずっとその様子を見ていてもいいのだけれど、このままでは話が進まないので助け舟を出すことにする。

「それじゃ、今度の休みにでも水着を買いに行きましょうか？」

「そ、そうか！うん、少年がそういうならしょうがないな、付き合おう」

僕が読み子さんを誘うと、彼女は思案顔から笑顔へと代わり足をぷらぷらと揺らし始めた。読み子さんの足と一緒に机がギシギシと悲鳴を上げているのは決して彼女が重いからではない。

そして読み子さんはあくまで自然さを装って聞いてきた。

「それで、少年はどんな服が好きなのだ？」

□　□　□　□

読み子さんと水着を買いに行く予定なんかを話していると、先生が来たので彼女は僕の隣の席へと座り、授業が始まった。

読み子さんは授業中はとても退屈そうにしていて、もっぱら外を眺めている。気が付くと授業中に居なくなっていることも何度か。

ちなみに僕の席は窓際の一番後ろという、夏と冬で天国と地獄が両方味わえるというベストポジションで、読み子さんはその隣なのだから外を見るには必然的に僕のほうを見ることになる。平凡な僕を眺めても何も楽しくないだろうから、彼女は外を見ているのだろう。しかし、読み子さんは僕と目が合うと笑顔を作って小さく手を振るくらいにはアピールをしてくれる。たとえ実際には外を見ていたとしても、健全な男子として美人にそうされるのは意外と嬉しいものだ。

たとえ授業を聞いてなくとも、読み子さんはほぼ最上位の成績を取り続けている。そして、彼女は運動神経も良い。頭脳、運動神経、容姿という2物どころか3物も天に与えられている彼女は、素質しかない僕とは天と地ほどの差がある。

人によっては素質があるだけで十分だ、という人も居るだろう。だがよく考えてほしい。

たかが人より魔法に適応性がある、ということがあっても使いどころが無ければ何の役にも立たない。ましてやその素質の所為で他が失われるなら尚更だ。魔王が居ない世界に生まれた勇者はきっと農家にすら劣るだろう。

唯一使える場所として研究所があるが、研究員として自分を売り込むならまだしも、自身の素質を売り込むのとでは同じ売り込むでも意味が違う。自ら進んで研究の実験体（モルモット）になるほど、僕は今の生活

に見切りをつけてはいない。それに研究員は身近に居るので間に合ってる。

「私を呼ぶ声がする！」

午前の授業も終わりに近づいたかという頃、突如読み子さんはそう叫ぶと窓から飛び降りた。ここは最上階となる４階であり、そこから飛び降りる人が居るとしたら自殺志願者かよほどの馬鹿くらいかだろう。

彼女を見ていると、馬鹿と天才は紙一重という言葉がふつふつと沸いてくる。

しかしそんな読み子さんの無駄とも言える行動もちゃんと理由があるらしく、どうも彼女は先生に当てられて前に出ることが激しく嫌いらしい。故に彼女は当てられる雰囲気が漂うと窓から外へと飛び出す。

最初こそ皆大騒ぎをしていたものの、もう慣れた様で、まるで何事も無いかの如く授業は進んでいく。

あの読み子さんが自分から飛び降りたくらいで怪我をするはずが無いのだ。

黙って何もしなければ才色兼備、それが読み子さんに対するクラス内の共通認識である。

□　□　□　□

授業も終わりお昼休みになると、僕は二人分の弁当を持って途中退場した読み子さんの元へと行くために屋上のドアを開いた。

寒風の吹く屋上で、睡眠を取っている読み子さんと秘密の花園にいるクマさんが迎えてくれた。どうも僕の女性に対する幻想、とい

うものは読み子さんに会ってからたちどころに壊されている気がしてならない。コレは由々しき自体だが水着サークルのドアは叩くことは無いだろう。
　そのまま嘆いていても時間と体温が失われていくだけなので、読み子さんを起こしてコウの作ってくれたお弁当を食べる。どうも真冬に屋上に来る人はいないらしく、この寒くて風通しの良いだけの場所は二人の占有地となっている。

「ところで読み子さん」
「なんだい？少年。あ、ウサギさん食べないなら私が貰おう」

　見惚れるほどの素早い手つきで僕のお弁当からウサギさんりんごを奪っていく読み子さんを見ながら、コレだけは言わないといけない、と己を奮い立たせて話しかける。

「その歳になってクマさんパンツを履いているのはどうかと思いますよ」
「んぐっ！」

　あまりにも慌てて食べ過ぎたのか、哀れ読み子さんはウサギさんを喉に詰まらせて目を白黒させている。しかし、僕が背中をさすってお茶を差し出したことで最悪の事態は回避できたようだ。

「しょ、少年！一体何を言い出すんだ」

　確かに自分でもどうかと思うが、大人の女性とも言える歳としてクマさんパンツはやめたほうがいいと思う。
　僕がそう心の中で呟いていると、読み子さんは赤い顔で箸を振り上げて抗議を続けている。

「大体何を根拠に私がクマさんパンツを履いているだなんていうのだ！」
「屋上で寝ていたときにスカートが捲りあがってましたよ」
「そういう時は見てみぬ振りをして直すのが紳士というものだろう！」

赤い顔の読み子さんはぷりぷりと怒りながらがつがつとお弁当をたいらげていく。怒りながらも手が止まらないのはさすがというべきか否か。

「それは気が回らなくてすみませんでした」

とはいえこのまま彼女の怒りが静まらないと、いずれは僕の弁当にまでその魔の手を伸ばし、僕は空腹という魔物を抱えながら午後の戦いへと身を投じる事態になりかねないので素直に謝る。

「…まぁ、私も少しばかり言い過ぎた」

読み子さんも興奮から立ち直ったのか、どこか顔色を伺うような視線を僕へと向けながらお茶を啜っている。

「そ、それで少年」
「何ですか？」
「その…だな…少年は…」

もじもじきょろきょろし始める読み子さん。微かな満腹感と冬の日差しの暖かさに脳がやられかけている僕。

「その…少年は…ああいう…下着は…嫌いか？」

まるで裁判官の判決を受けるかのごとく、おどおどとした表情で聞いてくる読み子さん。関係ないが、彼女の表情はコロコロと変わるので見てて飽きない。初めて見たときは、これで研究員が務まっていたのかと驚愕したものだ。

「いえ、嫌いじゃないですよ」

「ホントか！」

やはり陽気にやられているのか、僕の口からはそんな妄言が漏れた。まぁ、読み子さんは嬉しそうにしているし、結果オーライということにしておこう。

その後はいつもと変わりなく、時間いっぱいまで二人でだらだらと屋上で過ごした。

それにしても、いい加減別の場所を考えないと午後の授業に遅れかねない。

□　□　□　□

学校も終わり、徒歩数分という学校指定の寮へと戻ると、そこではコウが夕飯の準備をしていた。僕らが学校に言っている間コウは何をしているのか、ふと湧いた疑問と不安は食べ物の匂いにかき消される。

その後はいつものように3人で食事を取ったり、今度の休みに水着を買いに行く事を話したりして時間を過ごし、順番にお風呂に入って寝る時間になった。いい加減我が家にもストーブ以外の家電製品を導入するべきだろうか。

「では、第３３回バカップル談義をしようか」

コウはもう眠いのか半分くらい沈んでいる中、読み子さんは目をらんらんと輝かせて嬉しそうに始めた。
ちなみにバカップル談義とはバカップルとは何か、どういうことをするのか、という全く身にならないことを不定期に話し合うことらしい。発案者は当然ながら読み子さん。第〇回は適当なので、本当にその回数やっているわけではない。
しかしその談義も3分も経つとただの雑談と成り下がり、1時間もすると終了へと近づく。つまりいつも寝る前にしていることと大して変わらない。終了理由は僕が眠いから。

「ん、もう寝るのか？少年。ならしょうがないな」

そんな僕の様子を的確に見抜ける読み子さんは、何処か不満げながらも話を切り上げてくれる。
そして軽い問診をしてから、電気を消して二人とも布団へと寝転がる。当然ながら別々の布団である。そして今日も読み子さんは帰らなかった。

「…少年、もう寝たか？」
「いえ…まだです」
「そ、そうか」

暗い部屋の中で読み子さんの声が聞こえてくるのできちんと返す。正直に言うとかなり眠いのだが、いざ寝ようとすると読み子さんの声で旅立ちにストップが掛かる。

「その…だな、少年？何か忘れてはいないか？」
「そうですね…」

何か忘れていることはあっただろうか、と眠い頭で考える。明日の朝のご飯はセットした。洗濯物はコウと片付けた。宿題は出ていない。

「そ、その…アレだ、寝る前の…な？」

「んー…」

どうも寝る前というのは頭が回転せず、ふわふわとした思考で読み子さんの言葉の意味を考える。

「何か…ありましたっけ？」

段々と霞んでいく意識の中、読み子さんに返事をする。

「少年…？寝るな、寝るんじゃないぞ！ほ、私はまだ…お、お休みのききききキスをだな！？」

「…あー」

そういえば…してなかったっけ。

「ん…」

結論が出ると、わたわたとしている読み子さんへと近づき、長時間触れ合うだけのキスをする。

「…満足…しましたか？」

「…」

「では…おやすみなさい」

「うむ…おやすみ」

読み子さんの言葉を最後に僕の意識は途切れた。
そう、読み子さんは一応僕の彼女であり、つまり僕は読み子さんの彼氏ということになる。いざというとき、全くの他人よりは形式的にでも関係があったほうが都合がいい、という読み子さんの意見に納得してこうなった。どう都合がいいのかは教えてくれない。
ちなみに僕としては読み子さんの様な人よりも、もっと大人しい人のほうが好みなのだが、そんなことを言った日には涙目でぼこぼこと殴られるのは目に見えてる。仮にも彼氏彼女という関係上、自分が好みじゃないといわれるのはきついものがあるのだろう。
その経験の中でわかったのだけれど、読み子さんは意外と嫉妬深く、そして甘え下手だ。
ということで僕は、一応彼氏という関係上彼女を気遣っていかなければならない。
たとえ、そこに自分の意思があろうと無かろうと。

読み子さん説明書（後書き）

・読み子さんに辛いものや熱いものを与えないでください
・読み子さんに話しかけるなどの刺激を与えないでください
・読み子さんを見るときは明るいところで適度に離れて見ることにしましょう
・読み子さんは甘え下手なので上手に意思を汲み取ってあげることが大事です

さてさて・・・先行き不安しかないけど、どうなるんだろ？

とりあえず気が向いた時に向いたほうを書く予定なので、気長にどうぞ
誤字なんかの注意事項は活動報告かプロフィール
進行具合はプロフィール辺りに書いてます

ではでは、少しでも楽しんでいただけたら幸いです

最終戦争の後に燃え尽きたりしたとか何とか（前書き）

２話目が早いのはもはや鉄則

関係ないですが、入院して治った頭痛と吐き気がぶり返してきました

まだ軽いものなのでスルー中

人物表

主人公

名前なんて無かった　第２話でロリコン疑惑浮上

自称未来が読み子さん

一応主人公の彼女　主人公ラブ　研究員

コウノトリ君１号

ちびっ子　主人公好きー　使い魔

彼女

名前なんて（以下略　主人公愛

友人Ａ

きっと名前はあるさ　男です

最終戦争の後に燃え尽きたりしたとか何とか

昔、魔女狩りというものがあった。果たして時代遅れ甚だしいと、当時の人は思ったのか？そんなことはわからないが、実際に魔女狩りと言う名目で大虐殺が起きたのは事実。

魔術師であった人も。

魔術師を志していた人も。

そして全く関係ない人も。

等しく魔女狩りという名の下に殺された。そもそも、魔法を使えない人など居ないといわれていた時代に魔女狩り等をするのがおかしい。

けれども、最悪とは行かないまでも、最悪に近い終わり方で魔女狩りは終わりを告げた。

両陣営のトップがいきなり暗殺されたのである。目撃したであろう人は全員殺されたので、犯人は不明。

「ちょっと待ってください、ソレ本当に出るんですか？」

「ん？確実とは言えないが、私は出ると思うぞ？」

「そうですか・・・」

「うむ、それじゃ続きだが・・・」

冬の寒さも本気を出してきたこの時期になると、学生たちは最終戦争への準備を始める。具体的に言うと、目は血走り目の下にはクマが住み着き始め、うわ言のように単語を唱え続ける。人はその状況を一夜漬けと呼んだ。

当然、その阿鼻叫喚ともいえる地獄の試練には僕も例外ではなく、心配するコウを退け、もはや日本語なのかどうか疑いたくなる読み子さんの説明を聞き流し、彼女から発せられる甘い誘惑に屈したりして最終戦争へと身を投じた。

もしもこの戦争で出た結果として赤い物なんかが出たりすれば、読み子さんとコウは涙目になりながら『おやすみのよていひょう』と書かれた手帳を投げつけてくるだろうし、彼女は不貞寝をし起きなくなるので、僕の精神安定が非常に危うくなる。

出来る人は言うだろう、勉強なんて普段からしていればそんなにしなくてもいいんだよ、と。しかし僕は声を声は小さくても良いから言いたい！お前ら普段は勉強してねぇだろ！と。

もしかすると、万が一！中には普段から勉強をしている輩も居るかもしれない。しかし待って欲しい、彼らの言う『勉強』という言葉は花を種から育て、その上で大輪を咲かせるような長期的、かつ地道な作業のことを示すのであり、僕らの言う『勉強』とはパッと咲いてパッと散る、つまり花火の様なものを指している。同じ花でも花火と花じゃ大きく違う。よって僕らは普段から試験勉強などしない。僕らが願うことはただ一つ、打ち上げる花火が線香花火の如く細々と散らないことだけだ。南無三！

もしも線香花火の如く散ってしまった場合、その後に残るのは春季補習という血も涙も無い４文字のみだ。暖かい教室で眠気と戦いながら、教師と生徒が向かい合いひたすら補習を続ける。得をするのは誰だ。

かくして、ぼろぼろになりながらも最終戦争を乗り切った僕らの前に待ち受けているのは、なぜか期末試験後に１日だけある、『特別な理由が無い限りは絶対でなれければいけない補講予備日』という無駄に名前が長く、しかし拘束時間は朝から昼までと微妙に長い１日の出席だけになった。

別名として救済処置日とも言われるこの日、当然ながら常にレッドゾーンぎりぎりである僕も出席しないとかなりヤバイ。

□　□　□　□

目覚ましのベルが鳴り響く中、眠気が強く残る体を強引に立たせるとコーヒーの準備を始める。

「旦那様…今日は動かないほうが…」

心配そうにしている彼女に声を掛ける元気は出なかったので何とか微笑みかけ、コーヒーの粉を手に取る。すると突如ぐらり世界が揺れたかと思うと、僕の体は何かやわっこいものへと倒れ落ちた。

「旦那様？ナニヲしていらしているのですか？」

「うー…？」

暖かくやわっこいものからの声と、彼女からの冷たい声が倒れている僕に降り注ぐ。やがて、そのやわっこい小さき人は何を思ったのか、掛け布団越しに僕の体に抱きついてすやすやと眠りに落ちていった。突き刺さる誰かの視線、吹き出してくる暑さとは違う嫌な汗、認めたくない現実。

「そうですか…やっぱり旦那様はそういう小さな方がお好みと…？ほぅ…？さ、どうぞ続きを為さって下さい？倒れこむほど好きなのでしょう？」

「…」

きょ、今日はよく喋るのですね？、とは思いつつもそんな言葉を綴ることは出来るはずもなく、浮気現場がばれた夫の気分ってこんなものなのカナーと現実逃避をするしか無い次第。いや、一応僕が付き合ってるのは読み子さんなのだけれど…どっちも拙いなこんちくしょう。

とはいえ、僕も自分の意思で朝っぱらからやわっこくて小さき人

とラブシーンを演じているわけではない、体が動かないのだ。おまけに寒気もしてきた。『何時でも何処でも春模様ストーブ』にも限界が出てきたんだろうか。

ソレがわかるはずの彼女は満面の笑みで絶対零度の視線を送るという器用なことをし続けているし、読み子さんという爆弾は静かなカウントダウンを始めている。そして唯一残された希望であり原因であるコウは、僕に寝技を掛けたまま夢の旅人。

落下の衝撃でぼーっと回り続けている頭に妙案が閃くことも無く、僕の運命は決したかのように思われた。

「はぁ…全く、旦那様は仕方のない人ですね」

救済の女神はそう僕に微笑むと、なぜか僕の頭を自身の膝の上へと乗せた。

「動けないのでしょう？」

嬉しそうな彼女の膝枕という天国の裏では、僕に津波の如く押し寄せてる疲労感という地獄があることに彼女は気付いているのだろうか。

…たぶん知っててやってるんだな、という結論を出すと同時に僕の意識は体から外れた。

□　□　□　□

その後、起きたコウが死んだように倒れて居る僕を発見して騒いだり、その声で起きた読み子さんがさらに騒いだりと大騒ぎをしていると、登校時間となった。登校するのは読み子さんだけ、いわゆ

る僕は病欠。原因は連日連夜の勉強による体調不良ってことにしておいた。大方合ってると思うし。数日たって回復しなかったら、病院に行くことにしよう。

「少年、私が付いてなくても本当に大丈夫なんだな？」
「コウも居るし大丈夫だよ」
「そ、そうか…」

その後も読み子さんはなにやら理由をつけては学校を休もうとしたが、ついに諦めたのか友人についていった。彼女は極度の方向音痴で、放っておくと何処に行くかわからない。それにしても寮から学校まで約3分。何処に迷う要素があるんだろう？
どうやら彼女は二度寝に入ったのか姿が見えなく、部屋に残されたのは割烹着姿の小さき人と、ベットの中で寒気と頭痛、そして救済処置欠席という現実に耐えている悲しき学生が一人。

「おにーさん大丈夫ですか？」
「まぁ…それなりに大丈夫」

ボクは心配そうに覗き込んでくるコウの頭をなでると、布団の中にもぐりこんで眠りに付いた。
我が校には特に理由もわからず補講を休んだ学生を取り締まる、補講取締サークルというものが存在する。彼等は無断で補講を休んだ学生の下に行っては理由を聞き、その理由が正当なものでないと判断した場合は連行する、というのが表向きな活動内容。当然ながら、彼らは先生受けが良い。
しかしそのサークルに入るものは欠席が0の健康体であり、さらに成績が中間辺り、そして話がわかりノリが良いという、厳しいんだか厳しくないんだかわからない条件がある。
この条件にはきちんと理由が合って、まず補講取締サークルが補

講を休んでは元も子もないし、僕らの様な成績がヤバイ組は試験前夜の戦いで健康を害する可能性が高いのでダメ、さらに読み子さんの様な『単位が取れるのは当たり前、その上でどれだけの点数が取れるのか』というスコアアタック感覚で試験を受ける連中は先生の受けなんて気にしない、そして最後だが、学校をサボって友人と遊んでいた等という理由でも彼らの中では正当な理由とされる。コレが補講取締サークルが学生たちに嫌われてない大きな理由。

彼らの真の活動とは、不正な理由で補講を休んだ学生を正当な理由で休んだことにすることである。故に話がわかりノリが良いことは最も重要視される。しかし侮る無かれ、そんな彼らにも許せないものがある。

たとえば学校を休み彼女といちゃいちゃデート何ぞした日には、健全な学園生活の名の元に彼らはそのカップルの元へと参上し、お相手のことなんて気にもせず休んだ理由を聞き出し、デートを破壊していく事もあるのだ。仏の顔にも般若はある。

そんな彼らは今現在、なぜか僕の部屋に居て、なぜかコウの出したコーヒーを飲んで談笑をしている。ボクの休んだ理由は健全な内容であるし、彼らが現れる必要性は全く無いのだが、どうもボクの部屋に行くと美人の女の子と一緒に居られるというよからぬ噂を流した奴が居るらしく、時には補講を休むように闇討ちさえされかけた。

しかし、僕の成績を知るや否や泣き崩れるものが後を絶たなくなり、今や補講取締サークル内で僕の成績は禁句とまでなっている。理不尽さに泣きたい。

彼らはそんな低空飛行を続ける学生のことも気にせず談笑を楽しんだ後、それじゃそろそろ…とか何とかまるで別れを惜しむカップルの様なことを言いながら去っていった。本当に談笑しかしなかった。二度と来るな。

「ばいばーい」

コウはそんな彼らにも微笑ましく手を振った後、ちらちらと僕のほうを見ては何かを考えている様にしてうーうー唸っている。

「おにーさん、寒いー？」

「ちょっとね…」

何を考えているかは知らないけれど、正直に答えておく。

するとコウは何か閃いた様に笑顔になると後ろを向いて服を脱ぎ始めた。パンツしか付けていない、健康的な平たい肢体が蛍光灯の下に少しずつ晒される。それにしても、健康的ということ以外何も感じないのは哀しむべきか否か。

「そんな熱心に見つめて…やっぱり旦那様は小さき人がお好きなのですね？」

何時の間に起きたのか、彼女が僕の枕元に座っていた。そして僕が何もいえない事をいいことに、僕を追い詰めて遊ぶ。

「私も小さいときに旦那様の毒牙に掛かったが故に…」

「いやそれはない」

「ほぇ？」

「いや、何でもない」

思わず出た声にコウが驚いたように振り返ったので、僕は出来る限りの速度で首を回し、激しい動きに伴う首の痛みと頭痛に悶絶したりした。こう…振り向かれるといろいろと見えちゃうので。

せめて僕は紳士であり続けたい。

「そんなに必死になって・・・私のことは空気の様なものだと思っ

てくださってよろしいんですよ？ほら、見たいのならチャンスは今ですよ？」

なおも激しくなる彼女の言葉攻めに耐え抜いていると、やがて衣擦れの音が止み、とたとたと近づいてくる音がした。

そしてコウはそのまま僕の布団の中に入り込むと、僕の背中にぎゅっと抱きついてきた。背中全身で感じるやわっこい何かと子供特有の高い体温。

「…うー？」

コウはなにやら悩んだ様子でもぞもぞ抜け出すと、今度は僕の正面へと潜り込んで抱きついてきた。そのまま硬直する僕の手を自身の体に回し、まるで抱き合っているかのよう。

「えへへー♪」

そして満足したのか、彼女はにこーっと笑うと目を閉じた。彼女も言葉攻めに飽きて眠りに付いた様で、何ともいえない格好で一人残された僕。

やがて、あったかい抱き枕を抱いている僕の意識もまどろむ様になっていき、本日3度目の眠りへと落ちた。

□　□　□　□

目を覚ますと我が部屋の癒しであり、学生寮内のマスコット的立ち位置でもあるはずのコウが茶髪の野郎に変わっていた。僕が寝ている間に世界が終わったのかと思った。

「お、やっと起きたか」

そしてそいつは僕が起きた事を知ると、猫みたいな人懐っこい笑みを向けてきた。誤解の無いように言うが、僕は自分が寝てる間に野郎を部屋に招く趣味は無い。男なら誰だって目覚めのコールは野郎じゃなくて女性がいいと思う。

「なんでお前がここに居るんだ？」

「友が寝込んでいると聞いたのに…大人しく学校に居られるわけ無いだろ！」

僕が聞くと、大げさに箸を振り上げながら逆切れする茶髪野郎。台所からはコウが何かを焼いているような音と匂いがしてくることから、どうやら今は昼食時らしい。

だがそんな建前に引っかかるのは、今や絶滅危惧種とまで言われる純真無垢な可憐な少女か、コイツに恋してる見る目がない少女くらいだ。ということでリピート。

「で、何でお前がここに居るんだ？」

するとコイツはうむ…と真面目な顔になると。

「金貸してくれ、ついでに飯食わしてくれ」

とかのたまいやがった。頭に何か湧いているんだろうか？

「まぁそんな目で見るな、何も無料で貸して貰うわけじゃない。貸してくれたらコレを代わりにやろう！」

僕が彼女が放った絶対零度の視線を真似ようとして失敗し、まるで死人がすがりつくような視線を向けていると、堪えきれなくなったのか懐にある小瓶を渡してきた。

「・・・何コレ？」

「どうも風邪薬らしい…ある日部屋のポストに入ってた」

「お前はよくわからないものを代わりに渡すのか…」

確かに小瓶のラベルには丸っこい字で『かぜぐすり』と書いてある。しかしどう見ても風邪薬には見えない黄色のソレは、僕が受け取るとちゃぷんと波を立てた。

「まぁいいけどさ…いくらだ？」

「おお！やっぱりお前に頼ってよかったよ！」

まるで小躍りをしそうな彼こそ、腐れ縁という嫌な縁で結ばれている悪友である。彼は学校を一度もサボらずにいる僕とは正反対に、己の限界を試す！などという意味不明の理由で学校をボイコット、成績では常に僕と勝るとも劣らない激戦を繰り広げている。

しかし、そんな彼はその持ち前の美形と付き合ってみるとわかる人懐っこさ、そして誠実さで女性にはそれなりの人気があるようで、日々告白をされているとか、何とか。だが、彼はある理由からその告白を全て断っており、振った女性の数は今なお更新中である。

その理由として、彼は日々『メリーさんファンクラブ』なる怪しい集まりの幹部として暗躍しており、雨の日も風の日も、常に一人の女性のために動き続けるその姿勢はある種の感銘を受けざるをえない。それにしても、一体こんな男の何がいいのか…。

「あ、おにーさんおはようございます」

「うん、おはよう」

そんな馬鹿話をしていると、台所からコウが大きな皿を抱えて戻ってきた。そしてちゃぶ台の上に並ぶ料理の数々。ちなみに今のコウは裸ではなく割烹着姿。

「おにーさんは雑炊でいいですか？」
「それでいいよ、ありがとう」
「あい、わかりましたー」

ちょこちょこと動き回るコウを微笑ましい気分で眺めていると、隣に居た野郎が意地汚くぱちぱち箸を開いたり閉じたりしている様子が見えてげんなりとした。
やがて食事が始まるや否や、そいつはばくばくと目の前の料理を平らげ始めた。

「相変わらずよく食べるな…」
「作りがいがありますねー」

コウよ…こいつのためにそんなに作らなくてもいいんだぞ？
読み子さんががつがつと食べるなら、こいつはばくばくと喰う。しかも二人とも食べる量は大して変わらない。こいつと読み子さんが居たらエンゼル係数がすごいことになりそうだ。二人とも大食い店では要注意人物としてマークされている。
やがてその食事も終わると、奴は何事も無かったかのように帰っていった。本当に金を借りて昼食を取りに来ただけらしい。しかし今日は最期の足掻きを見せる日なのだが、成績は大丈夫なんだろうか？

「もしかして飲むおつもりですか？」

奴の残していった黄色い風邪薬？を眺めていると、突然彼女が話しかけてきた。

「いや…飲む気は無いんだけど」

火に油をくべて面白がるような奴の残したものである。飲んだらどういうことが起きることかは想像が付きづらい。かといって、捨てた場所で何かが起きたりするとそれはそれで目覚めが悪い。

はてさて…どうしたものか。

「おにーさん何持ってるんですか？」

「あいつが持ってきたものみたいなんだけどね。僕はこのとおりだからどうしようかと思ってさ」

興味津々に聞いてくるコウに小瓶を見せると、彼女は「ほぇー」と目を輝かせた。かぜぐすり、の字を見せない事に他意はない。

「よければ…飲む？」

「うー…？コウが飲んでもいいのですか？」

「うん、いいよ？」

別に興味津々なコウに勧めたことにも他意はない。だがしかし！本人が飲みたいと言っているのだから、コレは飲ませてもいいんじゃないかな！？

しばらくコウはうーうーと唸っていたが、やはり好奇心には勝てなかったのか小瓶をごきゅごきゅと飲み始めた。何だかわからない液体を…それはもう見事に。

「…」

「…」

その様子を固唾を呑んで見守る僕と彼女。
やがて小瓶も空になった様で、コロンとちゃぶ台の上に転がった。
そのまま数分の時が流れる。

（何も無かったのでしょうか？）
（うん…そうかもしれないね）

動かなくなったコウの方を見ながらひそひそと彼女と会話をしていると、突然コウが「んっ…」と色っぽいような声を出して僕の方を向いた。
コウの顔は赤く息が荒く、その目はとろん、と夢現。

「コ、コウ？」

僕が呼びかけると、彼女は何故か服をはだけさせると僕のほうにもたれかかってきた。

「おにー…さん…体がね…暑いのー…」

コウが甘えるような声を出す度に僕の首筋へと荒っぽい息が掛かってくる。そして密着させるように押し付けられる、やわっこい何かが僕の理性を溶かそうとしてくる。そして逃げようにも服を掴まれていてうまく逃げれない。
僕は何とか彼女に助けを求めようとしたのだが、彼女はそんな僕の様子を笑ってみているだけで全く助ける気は無い。つまりかなり拙い。
もしもこのままの状況が続けば、僕の鉄となりつつある理性もいずれは溶かされ、既成事実、読み子さんと彼女の冷たい視線、とらなくてはいけない責任、ロリコンで自分の欲求のために使い魔を呼

び出したと後ろ指を指される日々、逃避行、その果ての孤独死、と今後の展開が走馬灯の如く僕の脳内を駆け巡る。あの野郎、何て物を持ってきやがるんだ！

今はまだ、既に去っていった悪友を罵倒することで、現実から襲い掛かってくる様々な誘惑から逃れているが、ソレが費える事もそう遠くは無いだろう。

「にゃんとか…して…くれるですか…？」

僕にしがみつくようにして荒い息のコウが言ってくる。

「・・・」

ふと思ったのだが、このまま状況に流されても読み子さんは許してくれるのではないだろうか？確かに、コウの見た目はアレだし世間の目は冷たいだろう、しかしそんな荒波を乗り切ってこそ真の紳士としての…。

そこまで考えたところで、僕の首筋をコウがチロリと舐め、僕の理性は臨界点を突破した。

「んっ…」

僕は心の中で咆哮をあげると、もたれかかっている彼女を押し倒した。

「おにいさーん…」

目の前で潤んだ目のコウが囁くように呟いた。

そして僕は一世一代の力を全て振り絞ると全力でトイレへと逃げ込んだ。

「…旦那様はヘタレですね」

ドアの外で僕のことを呼ぶコウの声と急激な運動に伴う頭痛や吐き気に必死に耐えていると、彼女が冷たく言い放った。何とでもいえ！

そのままトイレで声がしなくなるまで数分、そして念には念を入れてもう数十分ほど取り残された最後の砦に立て篭もってから出ると、コウは眠りに付いた様で穏やかな寝息を立てていた。

はだけている服を直そうと努力するも服の構造がわからずに諦め、さらにそうしている自分が酷く惨めに思えてきたので、タオルケットを一枚掛けることでいいことにした。

とはいえ、今布団はコウが占領している状況であり、このまま昼の睡眠と行くのは二次災害が怖い。

「外、出よっか？」

「よろしいのでしょうか？」

ということで反応の悪い体を引きずりながら、久しぶりに彼女と外へと出ることにした。

□　□　□　□

外に出れば季節を主張する寒風が自重せず、出て数分で後悔したことはいうまでも無い。山中に学校を建てようとしたのは何処の誰だ。

それでも何とか足を踏ん張って山道を登って行くと、突然開けた広場へと出た。

生えている木が全て桜であり、見物客はほぼいないという花見の

穴場ともいえる。ただ今は冬、ピンクの吹雪は無く何処か切なくなる木達が辺りを包んでいる
ちなみに花見の季節になるとこの場所には悲しそうに桜を見ているドレス姿の金髪美人やら、ちっこいメイド服の少女やら、やたらと酒を飲み続ける銀髪の女性やらが現れるというもっぱらの噂だが、目撃者は非常に少ない。

「知ってますか？旦那様」

広場に着くや否や、笑顔で駆け出した彼女が回るようにして言う。彼女が回るたびに、流れるような銀色の髪や黄緑色の浴衣の裾も回るので、この場所で唯一咲いている花にも見える。

「桜の木の下には死体が埋まってるんですよ？」

何でも、一番大きな桜は死体が埋まっていてもおかしくないほど狂気に満ちた美しさを誇るとか何とか。生憎と僕も彼女も桜は苦手なので、近くに住んでいても拝見したことは無い。
そのまま彼女は嬉しそうにくるくると回り続け、やがて僕の手をとった。

「桜の木を見るとお祭りを思い出しますね」
「そうだね、あの時は夏だったけど」

夏の暑い日、二人で抜け出して祭りへと行った事がある。そのときの道中にとても綺麗な葉桜があった。

「ねぇ旦那様？」

街を見下ろしながら彼女が言う。夏の陽光に照らされた街は光り

輝いており、その中央には建設途中のまま放置された大きなタワーが見える。

「旦那様は…何時になったら私を忘れられるのでしょうね？」

彼女がそう言った瞬間、風が止んだ気がする。

「さぁ…僕は忘れられるのかな？」

「忘れられますよ」

街を見下ろす彼女の顔は、花が咲くような笑顔。

「だって、旦那様には素敵な彼女が居るじゃないですか」

二人の間を強い風が吹いた。

思わず目を閉じてまた開くと、彼女は眠りに付いたのかそこには誰も居なかった。

「忘れ・・・られるのかな？」

「…少年？」

誰もいない空間にぽつりと呟くと、後ろから声がした。

「読み子さん？」

「うむ…どうした？何か悲しいことでもあったのか？」

振り向くと読み子さんが心配そうな顔をして僕を覗き込んできた。

「ううん、大丈夫ですよ。それより読み子さんはどうしてここに？」

「う…い、いや…そのだな…私は…その」

僕が聞くと、読み子さんは赤い顔で何やら言いづらそうに街を見たり、桜のほうを見たりして僕と目を会わせようとしない。まぁ、大方迷ったんだろう。

「まぁいいですよ、それより帰りましょう？」

「う、うむ。帰ろうか」

その後、手がもじもじと何かを伝えたそうに動く読み子さんと手を繋いで歩いたり、帰り途中の山道で力尽きた僕が倒れかけたり、半裸のコウが読み子さんに見つかったりして大騒ぎになったが、その日は彼女を見ることは無かった。

最終戦争の後に燃え尽きたりしたとか何とか（後書き）

まぁ、ストックはあと1話あるんですけどね

正直連続で投稿するとここに書くことが無い・・・

まぁそんな事で

少しでもお楽しみ頂けたら幸いです

TOFUKING！（前書き）

見ればわかりますが3話です

人物表

主人公

甘いものは苦手です　容姿は想像にお任せ

自称未来が読み子さん

甘い物好きー　灰色ロング

コウノトリ君1号

嫌いなものほぼ無し　藍色ショート

彼女

甘い物好き猫舌　銀髪ロング

悪友

何でも好き　茶髪　名前を考えていたはずなのに忘れたという

ハル

甘いものは嫌い

TOFUKING!

「しょーねんー、まだかー？」
「はいはい、少し待っててくださいね」

『ふゆのよていひょう』と書かれた手帳を、僕の後頭部めがけてぺちぺちと叩いてくる読み子さんへと適当に返事をしながらコウの髪を梳く。ちなみにこの手帳、先のことが全て埋まっているというよくわからない手帳であり、予定表なのか計画帳なのかまるでわからない。そろそろ冬も終わるけど、四季で変えるんだろうか？

「しょーねんー、待ったぞー？」
「はいはい、良い子ですからもう少し待ってくださいね」

数分ごとに繰り返される読み子さん。
よく遠足の前日にワクワクしてて寝られず次の日寝坊するという人はいるが、読み子さんは全く逆で今日のために朝一番に目覚めた。おかげで身だしなみは全く終わらず、ぺちぺちは続く。
今日は休日ということで、何時だか約束した水着を買いに行く日。というか春季休みという褒美を貰った以上は毎日が休日なのだけど。
その後、身だしなみも終わり、ぺちぺちも終わったので皆で外へと出れば、朝のさわやかな空気と一緒に、死ぬんじゃないかと思うほどの寒気が迫ってくる。

「道はどうします？」
「んー…そうだな」

下宿から街へと続く道は3つあって、一つは迷うと変な廃屋に出ると言われるなだらかだけれど時間の掛かる道、もう一つは遅刻常連者にはおなじみとなっている急だけれど早い道、そして最後はモノレールに乗ること。

私的にはモノレールが一番楽なのだけれど、読み子さんもコウもモノレールは嫌いだから乗らないだろう。ちなみに水着サークルの連中はそれぞれを心臓破りの坂、精神崩しの坂、という名で呼んで日々トレーニングに活用しているらしい。他の乗客のことを考えてモノレールに乗らない彼らはとても紳士。

「コウは急なのがいいー！」

軽い耳鳴りに耳を傾けること数秒、こんなに寒くても元気いっぱいなコウがくるくると回りながら言った。春夏秋冬、いつも元気で羨ましい。

「よし、なだらかな方にしよう」
「むー！じゃあおにーさんおんぶ！」

心臓破りの坂を見ていた読み子さんが告げれば、不満そうにコウが唸り、そしてなぜか僕の背中に乗る。

「こ、コウノトリ君！自分で歩け！」
「やー！」
「…少年？」

読み子さんの冷ややかな視線を受け流そうと心臓破りの坂を見れば、なるほどそこには朝にも関わらず数人の勇者たちがえっほえっほと汗を飛び散らせていた。当然の如く服装は水着一枚。…凍死しないか心配になる。

「ところで読み子さん、水着サークルは嫌い？」

背中ですやすやと寝息を立てているコウを背負いなおすと、私機嫌が悪いんですオーラを全身で出している読み子さんへと聞く。

「嫌いなわけじゃないが…外でもあの格好なのだろう？」

読み子さんはそう言って後ろの下宿の方を振り返る。

「は、恥ずかしいではないか…」

「なるほど…つまり読み子さんはああいうのが好きだと？」

「少年！？」

その後、赤い顔で必死に言い訳する読み子の相手をしながらのんびりと坂を下る。

読み子さんは基本的に初心であり、思ったことを素直に言えないのである。その結果として生じる言葉責め。勇者たちに何か言葉に出来ないような感覚が芽生えてきていることを、彼女はまだ知らない。できれば一生知らないあなたで居てください。

□　□　□　□

街に着き、僕の背中から降ろされたコウとなぜか僕の背中へと乗ろうとする読み子さんを宥めたりしながら、人影のまばらな街をだらだらと歩いたり立ち止まったりすること数時間。

今の時期は当然冬の終わりの方であり、長くもだるい山道を終わった我々を迎えるのは遮るものの少ない寒風。つまり普通に寒い。

冬将軍は無理せず、さっさと引退してほしいものだ。
そんなに寒いならさっさと目的地へと行けばいいのだが、ところが問題はそう簡単には解決しない。
僕らの住んでいる街には山と川と湖はあるが海は無い。そして川と湖は森の中であり、つまりそこで泳ぐということは、魔物が闊歩する中、肌着一枚を頼りにきゃっきゃうふふと遊ぶことになる。そんなことをするのは『武器？防具？そんなもの己の肉体があれば何も要らないさ！』というたくましい人か、もしくは頭をやられた馬鹿くらいだろう。ちなみにプール場は無いので、遠出する必要がある。
そんな街に水着屋が流行るわけも無く、つまり誰一人として水着屋がある場所を知らないのだ。
結果、僕らは誰が望んだわけも無くびゅーびゃーと吹く寒さの中、昼食を終えた今もウィンドウショッピングなるものをし続けている。
ちなみに、でーとなのだからそう簡単に目的地に言ってはいけないのだ！というのが読み子さんの建前である。

「読み子さん…そろそろどこかで休みませんか？」
「少年！この程度の寒さでへこたれるのは精神が…精神が…」

何か言っている最中に壊れた機械の如く止まる読み子さん。視線の先にあるのは、一台の車。看板の様なところにはカラフルな字でアイス屋、と書かれている。どうやら冬の寒さにも負けずに元気に営業している様子。・・・冗談だろ。

「…食べたいんですか？」
「いいいや！そんなことはないぞ？」
「そうですか」
「いやしかしだな、少年…」

聞いてみると、赤い顔で否定するも何か言おうとがんばる読み子さん。人はああも手と足が同時に動くものなのか…。というよりよく転ばないな。

「コウは食べたいー！」
「んー、そっかー」

何やら言ってくる読み子さんをスルーしながら、コウと目線を合わせる。正直者が得をするとも言う。当然、僕は食べたくない。

「何味がいい？」
「まっちゃー！」
「あれ？少年？聞いているのか？少年ー！？」
「抹茶かー」
「少年…？その…私もだな…」

意外と渋いな…。

「それじゃ読み子さん、アイス買って来るんでその辺のベンチに居て貰えますか？」
「少年…」

そう告げると、まるで捨てられそうな子猫の様な顔をする読み子さん。そこまで食べたいのか。寒空の下で食べるアイスに何の未練があるのやら、まるで判らない。

「…わかりました、それで何味がいいんです？」
「う、うむ…」

ため息を付いて先を促せば、どうも考えてなかったらしくあー、

とかうー、とか唸り始めた。
そして暇になったのか僕の足元にぺたーと抱きつくコウ。ぬくぬくで動きたくなくなる僕。
めっさ寒いというのにどうしてこうも元気なのか、この人たちは。
そして読み子さんは結論が出たらしく、満点の笑顔でチョコ！といった。

「あ、旦那様、私も欲しいです」
「…」

アイス屋へ向かう僕の足が心なし重くなった気がする。

「メリー様ー！」

アスファルトを、メイド服の少女と銀髪に割烹着というすごい目立つ格好の女性が何時所に歩いている。
まぁ…目立ちさ加減ではアイスを食べるであろう僕らも大差しないと思うけれど。

「んー？何ですかー？」
「ユメは大きくなったらメリー様のお嫁さんになるのです！」
「おおー、それは楽しみですねー。それではお姫様、晩御飯は何がいいですか？」
「お肉！」
「魚肉ですね！」
「…おに「魚肉ですね？」」
「…うん」

何だろう…今微笑ましいものと後にとてつもなく悲しい物が見えたような…。それにしてもあの女性、彼女に似てる気がする。

そんな光景も眺めながらのろのろとアイス屋へと近づけば、目に写ったのはうろうろと落ち着き無くうろついている、悪友でもある茶髪の野郎であった。
寒空の下、どうしてこいつがここに？という疑問が湧く余地も無く、そいつは僕を素早く見つけて満点の笑顔で近づいてくるではないか。同じ笑顔でも読み子さんやコウとは月とすっぽんほどの差があるのは言うまでも無い。
急遽回れ右をしようとする僕の足。
だがしかし、そのたくらみはワクワクして待っているだろう読み子さんが見えて砕かれた。

「こんな寒い日にこんなとこで会うとは！さてはお前も馬鹿だな！そんなお前には俺にアイスを奢る権利をやろう！」
「…」

そうこうしている間に奴は僕の元へと近づき、アイス屋へと導こうとする。
悲しいことに手を振り払いながらもアイス屋へと向かわざるをえない僕。
車内も寒いのか、それとも暖房を入れると色々拙いのか、アイス屋さんの店員がいらっしゃいませー…と死にそうな声で迎えてくれた。何故この季節に売ろうと思った。

「チョコと抹茶と…」
「追加でバニラ１つ」
「…何でお前に奢らないといけないんだ？」
「ここであったのも何かの縁、奢っておいたほうが後々楽になるぞ？」

こいつ・・・頭打ったのか？

「楽になるとは思えないんだが…」
「まぁ聞け、お前ら水着買いに来たのに店が見つからなかったんだろ？今なら俺がアイス１つでで案内役を引き受けてやろう」

こいつにアイスを奢るべきか、それとも寒空の中歩き続けるか…。

「それに早くしないと店員が死ぬぞ？」

見れば店員さんは、客が居る前で下手なことは見せられん！というプロ根性を感じさせる笑顔で立ち続けていた。
その笑顔に負けたわけではないが、ここは店員さんのためにも、そして僕の健康のためにもこいつに奢るのもやむなしと判断した。
その後、ベンチで待っている読み子さんたちにアイスを渡しながら、こいつが合流する旨を伝えた。
読み子さんは最初しぶしぶといった感じで聞いていたが、アイスを舐め始めるとそんなことはどうでもよくなったのか、機嫌が良くなった。飴玉一つで誘拐されそうな性格である。
それにしてもこのアイス、激しく微妙だ。しかも冷たさで舌が麻痺してきた。

「コレは…微妙ですね」

彼女も同意の様で僕の持っているＴＯＦＵＫＩＮＧという、不思議なアイスを見つめる。
何が微妙ってキングの名にふさわしいその圧倒的な豆腐感。まるで冷たい豆腐を舐めているかの様な気分にさせられるその味と触感は何ともいえないハーモニーを築き上げている。考えた奴はよっぽど豆腐が好きだったんだろう。

「おにーさんのソレどういう味がするのー？」
当然一気に食べるわけでもなく、ちびちびと食べる僕に興味津々な様子で聞いてくる小さき人。
「んー・・・豆腐味」
「うー？」
どうも通じなかった様子で、コウはパタパタと僕の周りを動き始める。
やがて何か思いついたのか、その手に持っているアイスを僕のほうへと差し出してきた。
「こーかん！」
「ん？いいよ？」
「ダメだ！」
当然、断る理由があるわけも無くトレードは無事成功するかと思われたが、なぜか怒った感じの読み子さんの一言で中止となった。
「何でー！」
「とにかくダメだ！」
「むー！」
それに伴いコウはぷんぷんと怒り始め、読み子さんと睨みあい始めた。
茶髪の野郎はというと、その様子を面白そうに眺めている。火に油を注がないか非常に心配である。
それにしても読み子さん、そんなに豆腐味食べたかったのかな？

「まぁまぁ」

とはいえこのまま睨みあいが続くと拙いことになる。主にアイス的な意味で。見れば読み子さんのもコウのも、気温が低いとはいえ、太陽光線によってその短い生涯を閉じようとしている。

「あっ…」

ということで素早く読み子さんのアイスを取ると、僕のＴＯＦＵＫＩＮＧを渡し、彼らの犠牲が地へと落ちないように食べ始める。

食べた拍子に読み子さんが何とも言えない顔をしていたが、何だったのだろう。

「うー！じゃあおにーさんソレと交換！」

「はいはい」

ぷんぷんと怒っている小さき人ともトレードを成立させると、どうも機嫌が直ったのかチョコのアイスを舐め始めた。

その結果として、僕のアイスは抹茶という渋いものになってしまった。甘いものが苦手だからいいけどさ。

一方、読み子さんは僕のＴＯＦＵＫＩＮＧを真っ赤な顔で見つめている。

別に毒何て入ってないぞ、むしろ豆腐しか感じない。

「…お前って、そういうの気にしないんだな」

抹茶の冷たさと渋さを苦々しく味わっていると、飽きれた様な顔をして野郎が話しかけてきた。

「どういうこと？」

よく意味がわからないので聞き返してみると、奴は哀れみの視線を向けてきやがった。

「いや、わからないならそれで良い」

□　□　□　□

女性というものは、水着1枚決めるのにどうしてああも時間が掛かるのだろうか？

それなりに広い店内で、ああでもないこうでもないときゃっきゃっと騒いでいる読み子さんやコウを見ているとその疑問は費えることが無い。

「なぁ、なんであんなに時間掛かるんだ？」

「…僕も気になる」

隣では疲れた様子の茶髪の野郎がベンチにもたれ掛かっている。

女性用水着コーナーで男が二人放置される、この精神的疲労を誰かわかってくれ。

大体水着なんて下着と何が違うのだ。つまり今この状況、女性用水着コーナーで放置されているということは、下着コーナーで放置されているのと同じようなものなのではないのか！？

僕らはマネキンが水着や下着を着けている光景には何も感じないのに、世間からはまるで変態を見るかのごとく僕らに冷たく突き刺さるだろう。

コレでは疲れても仕方ないことだと思う。

なら何故他の場所に待たないのか？という疑問の理由は2つある。

１つ目はここは女性水着専門店だということ。それに伴いこいつが何故ここの場所を知っていたのか？という疑問が出たが、黙秘権とそれどころじゃない疲れによって言及は終了した。
そしてもう一つの理由が…

「少年少年！コレはどうだ？」
「…ええ、似合ってると思いますよ」
「そうか！」
「おにーさんおにーさん！コウはー？」
「うん、可愛い可愛い…」
「えへへー」

さっきから読み子さんとコウが何故か試着しては僕のところまで意見を求めに来て、そしてまた戻っていくというループが起きているからだ。
このやり取り、もう何度目になるかわからない。

「…お前も大変だな」

最初の方こそ面白そうにからかっていたコイツも、回数が１０を越えた辺りから哀れみと労いの視線を送るようになってきた。
水着店に入ってからおよそ2時間ほど、辺りは赤く染まり始めているが、水着は未だに決まらない。

「…！」
「どうした？」

ふと、疲れた様子でうな垂れていた悪友がすごい勢いで立ち上がった。

「すまない、緊急の用事が出来たのでここは去らせて貰おう」
「ここに一人置いてくのかよ！」
「それどころじゃねぇんだよ！」

奴も必死なら僕も必死だ。
まだ二人だったから良かったものの、ここで生贄…もとい戦友が失われては、僕へのダメージがすさまじいことになる。
そうこうしている間に、騒いでいる野郎2人の元に三つ編みの女性が近づいてきた。

「ひ…」

その女性を見た瞬間、顔が引き攣る僕と悪友。

「こ、こういうことなんで悪いな！」

その一瞬の隙を突いて僕の拘束から逃げ出すと、悪友はすごい勢いで走り去っていった。

「あ、逃げるな！ユウー！」

そして悪友に負けず劣らずの速度で奴を追っていく三つ編みの女性。
彼女こそ茶髪野郎の幼馴染で、奴に心底ほれている女性。名前はハルという。
ハルさんは黒く長い髪を三つ編みにしており、黙っていれば才色兼備の読み子さんと同様、彼女も黙ってじっとしていれば文学少女に見える。
しかし彼女の本質はそんなところではなく、簡単に言うととんでもない薬マニアなのである。健康マニアではない、薬マニアだ。

薬学科へと入学したその趣味は留まることを知らず、身近なものでは風邪薬から胃薬、縁の無いものでは媚薬から毒薬まで幅広く作るが…ここまでならただの薬好きの少女で終わっただろう。
問題はその薬たちを己の手段として活用することである。
酷いときには食事に毒を仕込まれ、寝ているときに注射されかけ、何らかの薬と偽って効果のわからない薬を送りつける。最近はソレも穏やかになったほうではあるが、未だ僕らの中では彼女は恐怖の象徴であり、警戒せざるを得ない女性の一人である。
逃げていった彼に幸あれ。
とはいえ、逃げた彼のことばかり気にしていてはしょうがない。

「少年少年！こっちのはどうかな？」
「…そうですね」

なぜなら僕は逃げられないのだから。

□　□　□　□

家についても、買った水着を披露したりしてご機嫌な読み子さんからも解放されると、お風呂場で一息入れる。
それにしても疲れた…。

「お疲れ様です、旦那様」
「…」

ふー、と息を吐いていると、突如目の前に現れる肌色の何か。その何かはスタイルがいい、とは言えないが胸の辺りにある２つの膨らみが女性であるということを確実に示していた。

そして混乱からか、僕の視線はその何かに釘付けとなっており、お風呂の蓋越しとは言え少し視線をずらせば見えてはいけないところも見えてしまいそうだ。
しかし誰が望んだわけも無いのに、混乱はそれだけでは収まらない。

「しょ、少年！よ、良ければせせ背中をだな！？」

突如お風呂場へと突入してくる読み子さん。こちらは一糸纏わぬ姿の彼女とは違い、きちんと今日買った水着を着ている。

「…」
「…」
「…」

三人、無言で見詰め合う中、僕の脳内ではエマージェンシーコールが鳴り響く。
能面の様な顔のまま、無言でお風呂場のドアを閉める読み子さん。

「見られてしまいましたね」

読み子さんが去り、嵐の前の静けさが支配する中、まるで悪戯が見つかった子供の様な顔で彼女が言った。
嵐の前の静けさも、過ぎ去ればあるのは嵐のみである。
突如開け放たれるドア。
その先には般若の面を被った、水着姿の女性。すらりとした、モデルのような体系の先には1本の包丁が握られており、静かに獲物を探している。
だがしかし、目的の獲物が見つからなかったのか、般若の面は二度三度とお風呂場を見渡した後、静かに去っていった。

「危ないところでしたね？」
再び現れた彼女が言った。
お願いだから静かにしていてくれ…。
「少年！少年が良ければせせせせ背中を流してやややろう！」
般若が去ってから数分。どうやら全て無かったことにするらしく、水着姿の読み子さんが再度現れた。
「あー！コウもー！」
「…」
何故かコウも現れた。
「しょ、少年？力具合はどうだ？」
「うん…いいと思いますよ」
「そ、そうか」
背中ではおっかなびっくりの様子で、読み子さんがさわさわと背中をこすっている。正直に言うともう少し強くても良いのだが、そんなことを言っている余裕は無い。
「おにーさんまだー？」
「はいはい、もう少し待ってね…」
僕の目の前では髪を泡立てたコウが目をつぶっており、早く流してほしいのか何度も催促してくるので、しゃくしゃくと髪を洗ってやると、気持ちよさそうに声を漏らした。

そして浴槽には何故か！彼女が浸かっており、僕の精神を削ることに余韻が無い。
一応、読み子さんからはぎりぎり見えないところで、コウは目をつぶっているので見えないのだが、僕からは丸見えである。しかも時折色々なところが見えそうになるのだからたまらない。
もしも万が一その光景に反応してしまえば、その先には何が待っているのかわからない。よって僕は精神がガリガリと削られる生き地獄を味わうしかない。
しかも読み子さんやコウに見つかった場合は血を見る可能性すらある。生き地獄が地獄になるのはさすがに嫌だ。
ならば目線を外せばいい、というがそう簡単に外せたら苦労はしない。僕も男なのである。
もしも一つだけ願うことが許されるならば、一人平穏にお風呂に入りたい。
とはいえ、その肌色を見ていると少しだけ感謝したいとも思えてしまった。

TOFUKING！（後書き）

アイスはクッキー＆クリームが好きです

４話目は未定

というより、もう片方の連載状況次第

ではでは、少しでも楽しんでいただけたら幸いです

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1630ba/

自称未来が読み子さん

2012年1月8日00時53分発行